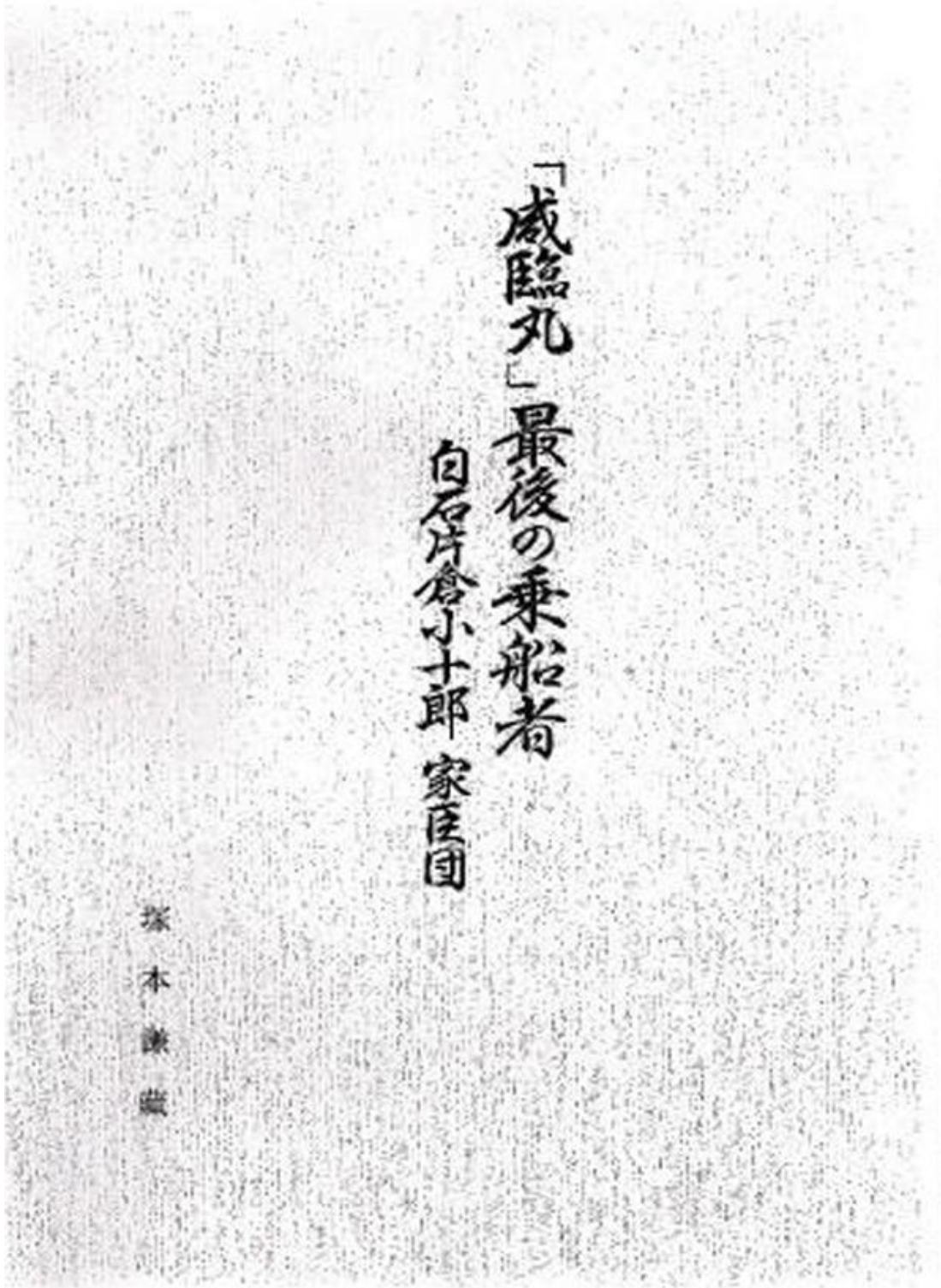


■ 塚本謙三『「咸臨丸」最後の乗船者 白石片倉小十郎家臣団』／

1993年私家版、2011年復刊

本書は1993年1月に出版された私家版。2011年9月、「咸臨丸とサラキ岬に夢みる会」（木古内町）が、終焉140周年を記念して復刊している。



## はじめに

『咸臨丸』については、太平洋横断航海のみがクローズアップされていた。幕末、戊辰戦争においては榎本艦隊の輸送船として参加したが清水港で政府軍の手に落ち、ここで船命も終わったものとする見方もあった。しかし実際には政府の手によって浦賀番所で補修が加えられていた。その間に戊辰戦争も終り、戦後処理が行なわれると奥羽諸藩では領地の削封や転封にともない多くの失業武士が生まれ、その救済が急務となっていた。その方策を北海道開拓ならびに北辺防備に求めることで解決しようとする具体案が示され、明治二年、開拓使を設置、その輸送船として『咸臨丸』『昇平丸』の二船を移管した。

今日、咸臨丸の残象を求めるなら、戊辰戦争をめきにして語ることはできない。とりわけ仙台藩支藩、白石片倉小十郎邦憲の治政に奥羽は戦乱の地と化し、片倉居城「益岡城」に奥羽列藩会議所が設置され、薩・長二藩を軸に展開する政府軍と対峙する連合体を組織すると共に会津・庄内藩を支援する行動に移っていった。

奥羽諸藩にとって不幸なことは、仙台藩士による奥羽鎮撫総督府、下参謀 世良修蔵を明治二年四月二十日、殺害に及んだことであった。この事件を契機に会津・庄内藩を除く二十五藩から成る奥羽列藩同盟が結成され、これに北越六藩を加え、三十一藩の奥羽越列藩同盟へと拡大、強化された。しかし列藩同盟の盟主、仙台、米澤両藩をはじめ、各藩とも内情を異にし、結果的には半年もたたないうちに敗北、解体するに至

った。

戊辰戦争終結によって奥羽越諸藩に対しては削封や転封といった沙汰が下され、仙台藩支藩、白石片倉家領には南部藩の転封が決定した。これにともない片倉家臣の家、屋敷とも南部藩に開け渡した結果、最終的には北海道移住に傾斜していった。その移住時の一船が咸臨丸であった。不運なことに移住途上、座礁破船する事故に見舞われている。

この咸臨丸事故に関し、開拓使函館支庁誌杉浦権判官によって東京にもたらされた最終報告では、あえて函館出帆日付を一日早める虚偽工作を行なっている。この謎は何であったか、これにかかわるのは片倉家臣の移住に起因するものと考え、若干の資料を参考にその背景を考察することにした。

また、晩年の咸臨丸を辿跡すれば、戊辰戦争をさけて語ることはできない。なお、咸臨丸と片倉家臣移住の背景を並列に記述するには違和感を覚えるが、あえて戊辰戦争とのかかわりの中で北海道入植地、『白石』『手稲』の地制や入植初期の状況を付記してみた。

内容については、更に検討を重ねる必要があるため古文書記録をできるだけ正しく記載し、あわせて原文を転写することによって拙稿の誤りをより正しい内容に訂正、発展していただくことを期待します。

「咸臨丸」最後の乗船者

―白石片倉小十郎 家臣団―

目次

はじめに	1
一、咸臨丸造船	
一、幕府軍艦「咸臨丸」に関する記録	2
二、造船地オランダ	8
三、幕府軍艦 咸臨丸	12
四、太平洋横断航海	12
五、その後の咸臨丸	18
六、咸臨丸拿捕	21
二、奥羽越列藩同盟敗北と白石支藩	
一、奥羽越列藩同盟敗北と戦後処理	24
二、仙台藩支藩 白石片倉小十郎	25
三、仙台藩削封と南部藩 白石転封	29

四、南部藩 盛岡へ帰藩 .....	32
五、蝦夷地から北海道へ .....	33
六、白石片倉家 北海道移住 .....	36
三、片倉家臣 北海道開拓使買属となる	
一、開拓使買属仰付 .....	41
二、北海道移住待機 .....	48
四、咸臨丸 開拓使に移管	
一、咸臨丸 開拓使に移管 .....	60
二、咸臨丸 木村萬平商店に貸与 .....	67
五、咸臨丸 寒風澤着船 .....	75
六、咸臨丸 サラキ岬で座礁・破船	
一、最後の乗船者 片倉家臣 .....	83
二、「老人モ怪我無之候」 .....	92

	七、北海道開拓使實屬 入植地	
	一、片倉家臣 札幌白石入植地	108
	二、片倉家臣 札幌手稲入植地	117
	三、白石入植地 分村	121
	四、付記	127
	結 び	128
	年 表	
	一、咸臨丸年表	129
	二、蝦夷地・北海道年表(明治初期)	130
	三、片倉家臣	
	幌別郡入植地(自費入植)	133
	四、片倉家臣	
	石狩郡入植地(買属入植)	134
	あとがき	136
	参考文献	137

---